直言

職種や部署の垣根を越え全職員が団結し地域から選ばれ信頼される病院を目指す

日々の実践を積み重ねてより良い医療を提供



福岡徳洲会病院 院長　下村 英紀（しもむら ひでき）

当院院長に4月に就任しました。人事は急なもので、私で務まるのかという思いもありましたが、東上震一理事長からは「診療姿勢を維持したまま、病院運営にも尽力してほしい」とのお言葉をいただき、拝命しました。私は1992年に熊本大学を卒業し、循環器内科に入局しました。初担当症例は左冠動脈主幹部（LMT）閉塞例で、経皮的心肺補助装置を導入したものの、当時はステントもなく、救命には至りませんでした。LMT病変の恐ろしさを痛感し、「何とか救命したい」という思いが循環器内科医としての原点となりました。

将来を担う生え抜きの医師育成する重要性を強く意識

3年目に福岡徳洲会病院へ派遣され、2カ月の間に研修医当直や沖永良部、与論、徳之島の各徳洲会病院への応援を経験する中、新井英和先生との出会いが転機となりました。当時、新井先生は湘南鎌倉総合病院からの赴任で、PCI（経皮的冠動脈形成術）症例が飛躍的に増え多くを学びました。4年目の岸和田徳洲会病院への応援では、横井良明先生から「Hope for the best, prepare for the worst.」という精神を学び、最悪の事態を想定して備える姿勢を、現在も診療の基本としています。

福岡病院復帰後は、心筋梗塞死亡率が本土の4倍超の離島、対馬で心臓カテーテル室の立ち上げを経験しました。循環器内科医1人で未経験スタッフと開始し、チーム医療とメディカルスタッフ教育の重要性を強く実感しました。その後、熊本大学へ戻りましたが、小川久雄教授（現・学長）のご差配により、翌年、福岡病院へ再派遣されました。若いチームで、多忙な臨床に従事しながら、大学主導の大規模多施設共同臨床研究にも参加し、虚血・再灌流や酸化ストレスに関する研究を継続して、学位を取得しました。

その一方で、大学人事のみによるチーム編成の難しさを感じ、将来を担う生え抜きの医師を育成する重要性を強く意識するようになりました。これまでに8人の医師を循環器内科へ迎え入れ、次代を担う人材の育成に責任を持って取り組みました。

当院は約100万人を対象に地域医療を担っています。一方で、半径10km圏内には300床超の6医療機関が集積し、激しい競争環境にありますが、救急・救命医療に注力し、年間約1万2,000件に上る急患を受け入れると共に、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、地域災害拠点病院、地域周産期母子医療センターとして、周産期から小児、高齢者まで、あらゆる世代の生命と健康を支える中核的な役割を果たしています。

医療の質向上と経営基盤強化へ7つの目標を掲げ一歩ずつ前進

私が理想と考える病院像は①常に患者様を第一に考え、心に寄り添う最良の医療とケアを提供、②支援を必要とする患者様を積極的に受け入れ、多職種・診療科・部署がシームレスに連携し、最善の医療を提供、③互いを尊重し、信頼し合い、温かく誇りを持てる職場環境を築く、④診療技術と人間性を磨き、誠実で質の高い医療の実践に努める、⑤学び、教え、育て合う文化を大切にし、研修医をはじめ、未来を担う医療人の育成と専門性の向上に努める、⑥地域の医療機関と信頼に基づく連携を深め、円滑な紹介・逆紹介の実施、役割分担の明確化や後方支援病院との連携強化、円滑な下り搬送を推進し、地域全体でより良い医療を提供、⑦グループ病院が互いに支え合い、人材不足に直面する離島・へき地病院への医師・スタッフの派遣や専門医療の相互支援を通じ、地域医療の継続と医療の質の向上に貢献。これらの目標は、決して容易に到達できるものではありませんが、一歩ずつ着実に前進し続ける姿勢を大切にしていきます。

また、現在、当院からは九州・離島・沖縄ブロックをはじめ神戸徳洲会病院、日鋼記念病院への応援派遣を行う一方、大垣徳洲会病院院長の間瀬隆弘先生、湘南鎌倉病院腎移植・ロボット手術センター長の田邉一成（かずなり）先生らに専門外来の支援を賜っています。今後、職種や部署の垣根を越えて全職員が力を合わせ、日々の実践を積み重ねることで、患者様により良い医療を提供し、地域から選ばれ、信頼される病院を目指したいと思います。その積み重ねが、医療の質の向上と経営基盤の強化につながると考え、より良い病院づくりに取り組んでまいります。

皆で頑張りましょう。

Beサポーターズ・プロジェクト

山形病院の通リハ利用者さん モンテディオ山形選手と交流



上林選手（中央）に応援の言葉をかける通所リハビリの利用者さん

山形徳洲会病院は8月18日、モンテディオ山形（J2リーグ所属）の選手を迎えて、通所リハビリテーションの利用者さんと交流する“Beサポーターズ・プロジェクト”活動を行った。周囲から「支えられる」機会の多い高齢者の方々が、チームを応援し「支える」存在になることを目指すのが同プロジェクト。サントリーウエルネスとJリーグが共同で推進している。

同院は以前からスポンサーとしてモンテディオ山形を支援し、整形外科部長の大沼寧副院長がチームドクターを担当。こうした縁で打診があり、地域に根差した病院として利用者さんが楽しめる機会を提供するため、実施を決めた。

当日は利用者さん23人が参加し、ゴールキーパーの上林大誠選手が来院。同県鶴岡市出身の20歳で、世代別日本代表（U16、U17、U18）に選ばれてきた期待の選手だ。見事なリフティングを披露後、一緒に体操を行い、利用者さんが応援メッセージを書いて贈呈。質問タイムを設けたりハイタッチや握手を行ったりして交流を図った。

「今は走れないけれど、心はいつも走って応援しています」、「頑張ってJ1に昇格してください。孫と一緒に応援しています」など温かいメッセージが寄せられた。横断幕にしてホームのNDソフトスタジアム山形（天童市）に掲げる予定だ。

上林選手は「皆さんの応援は必ず選手全員の力になります。試合で良い結果を残し、生活のなかの楽しみにしていただけるよう努力していきます」と挨拶し、J1昇格に強い意欲を見せた。通所リハビリ責任者である押野俊一・介護士長（介護福祉士）は「利用者さんも元気をもらえた様子でした。今後も利用者さんが生活にうるおいを感じられる取り組みをしていきたい」と抱負を語っている。

湘南鎌倉病院育友会

健康増進活動を推進

通常総会開き医療講演も



「皆さんの健康増進につながる活動を」と挨拶を行う兵藤会長

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）育友会（同院の後援組織）は7月1日、通常総会を開催し2025年度活動報告や同収支計算書、26年度活動計画、同収支予算書、26・27年度役員の各議案を審議し、いずれも承認した。同院の小林修三院長（医療法人徳洲会副理事長）をはじめ三役が来賓として出席した。

総会の冒頭、同育友会の兵藤忠洋会長は「今年度も引き続き、病院の事業に参画しながら、会員の皆さんの健康増進につながる活動を推進していきたいと考えています」と挨拶。

続いて小林院長が「弱者を置き去りにせず、先端医療を行う」という院長就任時のマニフェストを紹介したうえで、病院の取り組みの近況などを紹介。「皆さんとともに病院づくりを進め、医療のあり方を考えていければと思っています」と呼びかけた。坂本孝江・看護部長、深谷賢一事務長も挨拶を行った。

総会後には医療講演会を実施。根本敬・同院事務次長（理学療法士）が講師を務め、「健康は筋肉より○○で決まる」と題して、さまざまなエビデンスを示し健康に与える“社会的つながり”の重要性を強調した。

病気のはなし 233

過去2番目に早い流行

2026年インフルエンザ

厚生労働省は8月28日、インフルエンザ感染症の第34週（8月17～23日）の定点当たり報告数が1.11となり（前週比0.42増）、目安となる1.00を超えたため、流行期に入ったと発表した。前年同期に比べ0.8高く、2009年に次いで過去2番目に早い流行期入りだ（例年と異なる流行状況だった23年を除く）。

夏休み明け早々だが、すでに学年閉鎖、学級閉鎖が全国で相次いでいる。子ども同士の接触が今後増えるうえ、相次ぐ災害で避難所に人々が集まるケースも出てきていることから、各自治体は警戒を強めている。感染者がとくに多いのは、沖縄、岩手、青森、神奈川、埼玉など。沖縄を除けば東北・関東に多いが、いずれ全国で拡大していくと見られ、厚労省や自治体はマスクの着用、手洗いといった基本的な感染対策への協力を要請。

また、昨年も9月に流行開始、年明けに再流行を迎えていることから、ここから長い感染対策が必須と見られる。例年どおり10月上旬にはワクチン接種も始まるため、厚労省はとくに65歳以上の高齢者、60～64歳で心臓や腎臓、呼吸器の機能に障害のあるハイリスク患者さんに定期接種を推奨。また、インフルエンザワクチンと新型コロナワクチンは同日接種が可能で、両方の接種を検討するよう促している。

